０１／１２／０９　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：永遠のいのちを得るには
聖書箇所：マルコの福音書　１０章１７－２２節

　永遠のいのちを得るためには幼子のような態度が必要だと、前回イエスさまは弟子たちに教えられました。その後、イエスのもとに一人の青年がやってきます。この青年は非常に裕福で役人でもあったようです。今日はイエスとこの青年の会話から、永遠のいのちについて前回に続いて学んで行きます。

☆神の救いを得るために（永遠のいのちをいただくために）必要なこと
1．イエスを個人的に知ること　　17,18 節
　この青年の良い面を見ましょう。
(1)イエスに会うことを熱望していました。
17 節に、「走りよって」とあります。この青年も人々がイエスについて話すのを聞いていたのでしょう。その評判を聞き会って見たいと願っていたのでしょう。
(2)イエスを尊敬していました。
　「御前にひざまずいて」とあります。これは請願や何かお願いをするときの態度です。彼はイエスの卓越性を認めていたのです。
(3)イエスに関する正しい知識をある程度もっていました。
　尊い先生というのは、道徳的に正しい方、霊的に完全習得の秘訣を得ている、そのような人です。
(4)自分には永遠のいのちが必要であるとわかっていました。
　では、彼のまちがいは何でしょうか？
(1)行いによって永遠のいのちが得られると思っていました。
　この個所の平行記事をみますと、マタイ 19：16 には「どんな良いことをしたら、…」とあり、ルカにも 18：18「私は何をしたら…」とあります。
(2)イエスを知らなかったのです。
　イエスのことを聞いてはいたけれど、個人的な親しい交わりがなかったのです。18 節にある「尊い方」とは「良い方」と注にありますが、尊い方は神しかいないとイエスは言われます。尊いとは、完全な神に言及したことばなのです。
　青年はイエスを道徳的に正しい方として尊いといっているが、イエスは尊い方は神のみですよ、と青年に問い掛けているのです。青年はイエスを自らの神、救い主と受け入れているのかと。イエスは私の主人かどうか、救い主かどうかと。そのように個人的にイエスを受け入れることの大切さを教えておられます。

２．自分自身のことを正しく知ること　　19,20 節
　すなわち、救いが必要であると知ることです。19 節にはイエスがモーセの十戒を引用されています。なぜでしょう？それは、この青年に彼自身の罪を悟らせるためです。十戒は神の基準です。ローマ 5：13 を見ましょう。「…罪は、何かの律法がなければ、認められないものです。」とあります。神の基準によって自分の罪がわかるのです。また、ガラテヤ 3：19「では、律法とは何でしょうか。それは約束をお受けになった、この子孫が来られるときまで、違反を示すためにつけ加えられたもので、…」、24 節「こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。」。養育係りは信頼のおける人で、子どもを正しく導き、学校への送迎を担っている大切な働きがあります。そして(3)子どもの成長とともに不要になります。
律法は私たちの本当の姿を映す鏡のようなものです。しかし、律法によっては罪の赦しは得られません。律法を完全に守れる人はいないからです。20 節に青年の答えがあります。「先生」と呼びかけていますが、先ほどの「尊い」が抜けています。これは青年の失望の表われです。彼はイエスから何か新しいことを聞けるかと期待していたのですが、よく知っている律法をもちだされたので、がっかりしたのです。彼は自分の本当の姿が見えていないのです。詩篇 139：1-4 には神の全知についてこのように書かれています。「主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。あなたこそは私のすわるのも、立つのも、知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。ことばが私の舌にのぼる前に、なんと主よ、あなたはそれをことごとく知っておられます。」と。私たちの心の思いも行為も行動も、そしてことばもすべて知っておられるのです。

しかし、私たちはそのことをよくわかっていないのです。自分でいくら決心しても罪から解放されることはありません。それは私たち自身がよくわかっていることです。自分を本当によく知れば、醜い罪人だということがわかるはずです。そこで自分には救いが必要であることがわかります。箴言 28：13,14 にはこのように言われています。「自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。幸いなことよ。いつも主を恐れている人は。しかし心をかたくなにする人はわざわいに陥る。」と。

３．正しい選択が必要である　　21,22 節

イエスはこの青年に善いことをするようにと勧められました。天に宝を積みなさい、そして、わたしについて来なさいと。これは弟子になりなさいということです。青年に大きな選択を迫られたのです。本当に価値あるもののために生きなさいと。それが永遠のいのち、祝福につながるからと。しかし、青年はそれを拒みました。イエスの弟子になることを拒んだのです。

以上、これらのことを自分自身に問い掛けてください。イエスは私自身の主人、救い主でしょうか？神への思いは真実でしょうか？　自分の信仰を吟味しましょう。

人となって私のためにこの世に来てくださったイエスに、私は何をもって応えて行きましょうか。